

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：12608

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K21108

研究課題名（和文）妊産婦はなぜ孤立するまで社会的ネットワーク形成行動をとらないのか？

研究課題名（英文）Why don't pregnant and infant mothers form social networks until they are isolated?

研究代表者

中谷 桃子（Nakatani, Momoko）

東京工業大学・工学院・准教授

研究者番号：40910154

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：妊産婦の孤立解消を大目的とし、初産婦が孤立化する要因のひとつは、妊娠期に社会的ネットワーク形成の必要性を認識していないからではないかという仮説に着眼し、その検証を行った。同一対象者に、妊娠中と産後直後、および産後約半年、社会的ネットワークの必要性の認識、およびその変化の予測についての質問紙調査を行った結果、初産婦は、妊娠期よりも産後にさまざまな人とさまざまな話題をより話したい気持ちになることが明らかになった。また、産後直後に友人と話したい気持ちになることを予測できていなかった。これら結果は、必要性の認識を広めることや、子育ての社会化の概念を産褥期に広げることの必要性を示唆する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼い子どもを育てる親の孤立は、産後鬱抑止のためにも、解決すべき大きな喫緊の社会課題である。本研究の結果、産後は、他者と話したい気持ちが産前と比べて有意に増加していることが明らかとなった。また、ほぼすべての話題について、また相手別では友人と話したいという気持ちを、産前には予測できていなかった。

産後直後は外出がままならないことを踏まえると、妊娠中、または妊娠前の早い段階から、「産後は産前以上に社会的ネットワークを必要とする」ことを知る機会を増やすことが必要不可欠である。

研究成果の概要（英文）：Web surveys tested the hypothesis that first-time mothers' postpartum isolation is due to unawareness of the need for social networks during pregnancy. The survey was conducted during pregnancy, immediately after childbirth, and six months postpartum, targeting the same individuals. Results showed that the "desire to talk" with various people significantly increased after childbirth. It was also found that this desire was underestimated before childbirth. This suggests that underestimating the desire to talk before childbirth may explain the lack of social network formation during pregnancy.

研究分野：ソーシャルウェルビーイング

キーワード：子育て支援 Well-being 孤立 Web調査

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

初産婦の孤立を解消し、産後鬱を予防することは、解決すべき重要な社会課題である。孤立感が最も高い時期は産後 5 週間以内であることが知られており、この時期は外出がままならない時期であることを踏まえると、妊娠期から周囲の人々との関係性を築き、社会的なつながり(社会的ネットワーク)を構築しておくことが産後の孤立防止のために必要となる。

しかしながら、妊娠出産期は、短期間に大きな心的・身体的・社会的変化を遂げ、先のことを予測することが難しい。したがって初めて出産を迎える妊婦自身がそもそも社会的ネットワークの必要性を認識していない可能性がある。妊産婦自身が社会的ネットワークの必要性を認識していなければ、予防的行動につながることは期待できない。また、出産後も同様に、自分自身が社会的ネットワークを求めるとどうか、その気持ちはどう変遷するかは明らかではない。そこで本研究では、妊産婦が社会的ネットワークの必要性をどのように予測し、その認識がどのように変化するかを調査することとした。

なお、本調査は世界中を混乱に陥れた COVID-19 の流行期間中に行われた(質問紙配布は 2022 年 2 月に開始)。本研究は流行の直接の影響に焦点はあてたものではないが、人々の社会的つながりの重要性を再認識させる大きなきっかけとなった感染症流行も、調査の背景として押さえておく必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、妊産婦が産前産後に社会的ネットワークの必要性をどのように予測し、その認識がどのように変化するかを調査することを目的とする。最も孤立の心配される初産婦に焦点を当て、社会的ネットワークの「必要性の予測」とその「認識の変化」を明らかにする。産前産後の妊産婦の認識や、ギャップの存在を詳しく調査することは、支援策を検討する上で重要である。また、これらの結果を受け、孤立軽減に寄与する社会的ネットワークの形成を支援するための指針を得ることを目指す。

3. 研究の方法

妊娠前後の変化を調べるため、妊娠中、産後 1-2 か月(「産後直後」)、5-6 か月(「産後半年」)に、同一対象者に Web 調査を行った。加えて、産後の孤立を解消するための方策について着想を得るため、子育て経験者や支援者を参加者とするワークショップを実施した。以下、それぞれについて詳述する。

3 - 1. WEB調査

Web 調査については、社会的ネットワークを構築する相手と話題とを限定した形で、「話したい気持ち」と「満足度」に着目し、それらが妊娠、出産を経てどのように変化するかを調査した。これは、コミュニケーション意向は、話し相手や話題によって異なることが予想されるためである。相手については、「子育て中の友人・知人」、「子育てをしていない友人・知人」、「配偶者(パートナー)」、「親や祖父母などの親族」、「医師や助産師、心理士などの専門職」、「児童館や子育て施設スタッフなどの子育て支援者」などについてそれぞれ質問する形とした。また話題については、「判断に迷ったことや物事を進めるための相談」といった一般的な相談や愚痴に加え、「出産や子育てに関する何気ない話」など、子育てに限定した話題についても回答を求めることとした。加えて、コミュニケーション意向の変化を予測できているかどうかを明らかにするため、妊娠時、産後直後にそれぞれ、出産後や産後半年後に自分の気持ちはどうなっていると思うか、という予測について回答を求めた。数か月後の実態と、その時点での予測を照らし合わせることで、妊産婦が自分自身のコミュニケーション意向を予測できているかを明らかにできる。

3 - 2. 方策立案のためのワークショップ

次に、方策立案を目的に実施したワークショップ(WS)について述べる。WS は、横浜市戸塚区をフィールドとし、子育てをしている当事者やその支援者などの関係者(地域ケアプラザ職員や、保育養成校の教員等)を主な参加者とし、さらに大学生等の子育て未経験者や生まない選択をした方など、敢えてさまざまな属性の方を参加者とした。WS は全 4 日間行われ、うち 1 日は子ども(未就学児~高校生)を対象とした。WS テーマとしては「子育てにやさしいまちづくり」を掲げ、初日にはデンマークにおける子育てを垣間見る動画や、国内外の子育てを取り巻く状況を統計データを用いて概観した。2 日目以降は、まち歩きによる課題発見や、アイデア出しを経て、組成した各チームにて、方策を提案した。

同 WS は、「社会課題を自分ごと化する」というサブ目的も掲げ、実施した。現状の生活では子育てとは関係のない暮らしをしている方々であっても、同じ社会を生きる一員として、その課題をどう捉えるかを話し合うことで、課題が自分ごとになり課題解決の一翼を担える可能性があると考えた。そこで、同課題が自分とどれだけ近い/遠い課題ととらえているかについても、質問紙を用いて評価した。

4. 研究成果

Web調査では、各タイミングにおける回収数は、妊娠時 1183 件、産後直後 431 件、産後半年 253 件となった。分析対象は、3 回の質問紙すべてに回答した 253 件とした。平均年齢は平均 30.5 歳（18～43 歳, SD=4.47）であった。なお、3 回の質問紙すべてに回答した回答者は、里帰り出産率がそうでない回答者（離脱者）と比較して高く、配偶者（パートナー）が同居している割合が高く、また妊娠中／子育て中の友人がいる人の割合も高かった。そのため、以降で述べる結果は、離脱者を含めるとより顕著になる可能性がある点に留意されたい。

Web調査の結果は、妊娠期と比較して、産後直後は、さまざまな話題に対して、友人や親、支援者などと話したい気持ちが増加することが明らかになった。相手別にみても、親や友人、専門職や子育て支援スタッフといった相手に対し、産後直後に話したい気持ちが増していた。すなわち、妊産婦は相手や話題に関わらず、一般的に産後に社会的ネットワークを求める気持ちが増加する傾向にあることが明らかとなった。特に、子育て中の友人に対しては、話したい気持ちが増産後直後に増加し、その気持ちは概ね維持された一方で、満足度が産後半年で低下していた点が特徴的であった。満足度低下の理由を自由記述から読み取ると、会う機会を持っていないことに対して、不満を感じていたようである。したがって、子育て中の友人については、そもそも会話ができる機会をいかに創出するかが課題であるといえるだろう。また、子育て支援者とも、産後直後に話したい気持ちが増加し、その気持ちは概ね維持された。親などの親族や、医師などの専門職とは、産後直後に一時的に話したい気持ちが増加していたが、産後半年でその気持ちは再び低下に転じていた。これらの結果は、産後直後の経験者によるケアがいかに重要かを示唆する。既に乳児家庭全戸訪問事業が児童福祉法第 6 条に定められているなど、産後間もない時期を支える制度は多く存在するが、「話したい気持ち」を支えるさらなる施策が求められる。また、産後間もない時期は、外出がままならないことに加え、本調査実施期間中は、COVID-19 やインフルエンザの流行も相まって、物理的に会うことをためらう妊産婦も多かったことが想定される。こうした状況においては、例えばオンラインの話せる場を提供など、対面にこだわらず「話したい気持ち」を満たせる方法をさらに拡げていくことが必要となるだろう。

【産前の予測 vs 産後直後の実態】

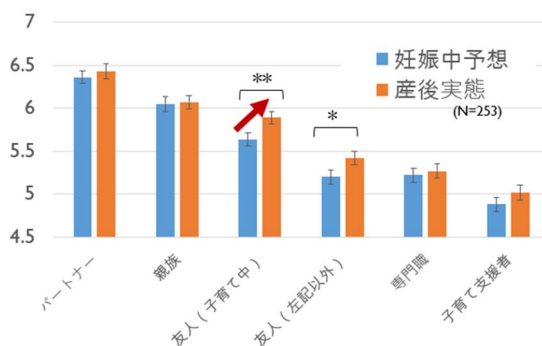


図1 産前に予測した産後の「話したい気持ち」と、産後直後の「話したい気持ち」のギャップ

産前の予測と実態とのギャップについては、ほぼすべての話題について、また相手別では友人と話したいという気持ちを、産前には低く見積もっていたことが明らかになった（図1に相手別の結果を記載）。

すなわち、友人と話したい気持ちは産前に正しく見積もれておらず、そのことは、妊娠期に社会的ネットワーク形成行動をとらない理由のひとつとなっていた可能性が浮き彫りになった。これらのことから、妊娠中、または妊娠前の早い段階から、「産後は産前以上に友人との社会的ネットワークを必要とする」ことを知る機会を増やすことが必要であることが考察される。

産後 0-2 ヶ月頃の時期は、医療、福祉の制度・支援の隙間になっているとの指摘もある。日本では、産後 1 ヶ月は実家で過ごすなど、産後の肥立ちは家族で支えることが主流であった。産褥期の支援は家族で行うものである、というこうした規範が、この時期の外部の支援を困難にしている面もある。したがって、パートナーとのみで産褥期を乗り切る形ではなく、「子育ての社会化」の概念を産後間もない時期にも拡大し、地域ぐるみで支える体制を実現することが必要であると考えられる。

次に、産後の孤立を防ぐための具体的な方策を検討することを目的に実施したWSの結果について述べる。WS当日は、子育て中の当事者や子育て支援団体の関係者に加え、保育士を目指す若者や一般の大学生など、多様な参加者が集まり、子育てにやさしいまちづくりを行うための方策が話し合われた。議論の結果、まちなかで子育て中の人とそうでない人とで自然と会話が生まれる仕組みや、多様な人が気軽に出入りし交流できる場の必要性が浮き彫りになった。議論のアウトプットを今後、社会実装していくことで、上述の課題解決につながることを期待される。さらに、こうした議論を行う場をつくることや活動を行うこと自体が、子育て世帯とそれ以外の人々の社会的ネットワークの構築を支援するものと考えられ、今後、産後の生活を具体的にイメージできるような社会づくりが必要とされているといえるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松浦啓, 勝山幸, 中谷桃子
2. 発表標題 初産婦は人とどのように関わりたいと思っているのか：産前産後の比較を通して
3. 学会等名 ヒューマンインタフェース学会研究会 SIG-CE-27
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Nana Hamaguchi, Momoko Nakatani, Yuki Taoka, Japan; Mika Yasuoka, Denmark; Tomomi Miyata, Shigeki Saito, Erika Ashikaga, Kakagu Komazaki, Ushio Shibusawa, Yoshiki Nishikawa
2. 発表標題 How Can we Encourage Ownership to Social Challenges? Comparison of Three Types of Workshop Themes
3. 学会等名 HCI International2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中谷桃子, 勝山幸
2. 発表標題 初産婦が求める人との関わりは、産前産後でどのように変化するのか？
3. 学会等名 ヒューマンインタフェース学会研究会 SIG-CE-28
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------